

共生のきずなを求めて!

# NPO 現代座

2022 年 9 月 1 日 発行  
(通巻 494 号) 定価 100 円

## 現代座レポート No. 91

- ・『プリンギン・ホテルにて』公演 無事終了 (1)
- ・日本人の戦争体験を振り返り 新しい一步を (2)
- ・スタジオ・ポラーノについて 八木澤 賢 (3)
- ・われらいずこより来たる⑩ 新しい生き方を探して (4-7)
- ・みどり子ども会の陶芸教室 お知らせ (8)
- ・会館日誌 会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987



カーテンコールでインドネシア民謡の乾杯の歌「リソイ」を合唱

### NPO 現代座公演 『プリンギン・ホテルにて』 無事終了しました

2022 年 7 月 7 日から 11 日まで、現代座ホールで構成劇「プリンギン・ホテルにて」を上演しました。ちょうどコロナの第 7 波が始まる直前の感染者が増え始めた時期で、観客数を 55 人に制限して 5 ステージの公演を無事に終えることが出来ました。

参加者は 238 人でした。大変な中おいでくださった方に感謝するとともに、「やっぱり今はまだ行かれないけどがんばって！」と励ましてくださった、たくさんの方の来られなかった皆さんにも、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

昨年の『風は故郷へ』公演がコロナの為に 3 ステージしか出来なかったこともあり、本当に久しぶりの公演でした。今年も感染対策をしながらの稽古と公演で、コロナ前のような会館内での歓談や交流は出来ませんでした。多くの方から「よかった」と言っていたのでホッとしました。

今回の『プリンギン・ホテルにて』は 1994 年に公演した『熱い風』を制作するための取材中、現在の日本人老医師から伺った話を、木村快が改めてインドネシア独立戦争に参加した元日本兵に焦点を絞り、語り芝居を加えた構成劇としたものです。インドネシア独立戦争のことは知られていないことが多く、俳優たちも学びながら稽古で、どこまでお客様に伝えられるか試行錯誤してきました。

それだけに「戦争が過ぎ去った昔のことではなく、自分たちの未来でもある」と言っていたことは本当にうれしいことでした。上演困難な状況が続いても、常にお客様の前で芝居が出来るように、努力したいと思えます。

### 「アンケートより」

参加者 238 人中 92 人の方から当日及びメールで頂きました。  
●戦争を知る年代として心にせまるものがありました。まだまだ知らなかった事があったんですね。感動です。

●「インドネシア独立戦争」をはじめて知ることができました。「われわれ戦争に関わった者はつぐない無しに平和を語る事ができない」との言葉は重みがありました。  
●インドネシアに行きたくなりました。

●植民地の人々が言葉や文化の壁を乗り越えて、1950年に誕生させた国だった。無名の日本人たちも参加してたことを初めて知りました。

●とても分かりやすく面白かったです。歴史にもとづいた作品にふれるのはこわいことですが、知ること心が豊かになります。

●戦争は国と国の問題ではなく、生きている個人の立場から見つめ直すことの大切さを教えられました。

●現代座の舞台にはいつも人間の尊厳が描かれていると思いました。深く考えさせられました。

●舞台は 1995 年に設定されている。当時 47 歳だった自分にとって、戦中、戦後、これからの時代を考えさせられたように思っています。

## 『ブリンギン・ホテルにて』 戦争体験を振り返り、新しい一歩を

### ◆日本経済の転換期

この芝居はある医療一家で育った吉永千里が過去を振り返り、「1995年、わたしはインドネシアでボランティア医師として働く父を訪ねました」と客席に語りかけるところから始まります。

その頃、日本経済は大きな転換期を迎え、企業の倒産併合がつづいていました。幕が開くとインドネシア北部の島にある小さなホテルのロビーです。久しぶりに会った父古賀良平に、千里は「病院が潰れそうだから日本に帰って助けて欲しい」と懇願しますが、古賀はただ「帰れない」と言っただけです。



◆古賀良平は1943年（昭和18年）に学徒動員兵として召集され、インドネシア義勇軍の教官に配属されました。そして日本の政策に従って、オランダを倒して日本と共にアジアの平和を築

こうと呼びかけていました。しかし1945年の敗戦後、イギリス・オランダ占領軍は日本軍に「独立をめ

ざすインドネシア人を摘発せよ」と命じます。悩んだ末、古賀は日本軍を脱走してインドネシア独立戦争に参加したのである。そのとき、日本軍警護兵の追及から古賀を助けようとした有馬兵長を、心ならずも独立軍に引き込んでしまいました。

その有馬が戦場で倒れ、なんとしても助けねばと思いつつも、ついに古賀は捕虜となり、日本に送還されます。古賀は必ずインドネシアに戻り、自分もインドネシアの土となるのだと誓いました。

50歳を過ぎ、古賀は外科医としての限界を感じ、インドネシア僻地の医療を志します。せめて有馬の消息だけでも調べたいからと知りました。そんな父の人生を、千里は初めて知り、自分も医療の原点に立ち返らねばと考えるようになります。



◆観客に伝えるための課題  
インドネシアのこと、特に太平洋戦争とその後のインドネシア独立戦争のことは、俳優たちもほとんど知らないことなので、これをお客様にどう伝えるかは大きな課題



戦場の体験を、それぞれの人間の立場から伝えるにはどうすればよいのか。日本伝統の語り芝居ならどう表現するのだろうか。

でした。そこで「武蔵野の歌が聞こえる」をやったように絵や地図を使って分かりやすく説明することにしました。長谷川葉月が工夫を凝らした大きな地図を使つての説明は大好評でした。

娘に語る戦友有馬との戦争中の経験は、中村保好、木の下敬志、八木浩司の3人の俳優による語り芝居で表現してみました。ただの芝居ではなく、状況を説明しながら2人の体験をどう伝えるか。俳優達と演出の八木澤賢は公演直前まで試行錯誤を繰り返していました。

### ◆47年ぶりの再会

物語の終幕は47年ぶりの古賀と有馬の再会になります。有馬はインドネシア国籍に帰化し、戦争に参加した日本人の償いとして、熱帯雨林を守る運動を続けていました。

有馬と古賀を演じるのはベテラン俳優の今村純二と黒澤義之ですが、今村は劇



「古賀！生きてたのか。俺は倒れたときインドネシア人が自宅にかくまって看病してくれた。だからインドネシア人として生きてる。お互い精一杯生きたんだな。」

◆現代座にとっても新しい一歩  
今回の公演はNPO現代座の俳優とスタッフ全員で力を合わせて創り上げました。照明の渋谷博史が照明の工夫だけで作った青い空とくっきりした水平線の海は、芝居の広がりを作りました。

俳優の矢川千尋は音響、同じく俳優の東志野香は制作という初めての仕事に挑みました。舞台監督の青木文太郎もインドネシアの説明では長谷川の小物の出し入れの助手として舞台に立ちました。そして演出の八木澤賢はセットも自分で作りながら、全体を引っ張りました。

これからの活動につながる大きな一歩になったと思います。



## スタジオ・ポラーノについて

八木澤賢



八木澤 賢

2022年7月のNPO現代座公演「プリンギン・ホテルにて」の公演から2ヶ月程がたちまじ、世の中の暗い状況が日常化していることに自身、戸惑いながら過ごしている私ですが、会員の皆様はどうお過ごしでしょうか。

さて、今回は現代座会館の一角に居を構える、劇団「スタジオ・ポラーノ」と八木澤賢について改めて紹介します。

私、八木澤賢はNPO現代座の活動に共鳴して正会員となりました。NPO現代座の日常活動としては、主に現代座会館・劇場の管理や公演のスタッフをしておりますが、その他の活動として、劇団「スタジオ・ポラーノ」を運営しています。

「ポラーノ」とは、「ポラーノの広場」という宮沢賢治の短編小説（童話）から借りた名前です。簡単に言えば、「理想の場所、伝説の広場」ということで、そんな場所づくりや劇づくりをしていこうと名付けました。以前は杉並区に事務所を構えていましたが、木村快さんや木下美智子さんと接するうちに、もっとNPO現代座の活動にも寄与したいと2年前にこちらに移って来たのです。

「スタジオ・ポラーノ」は日本児童・青少年演劇劇団協同組合（児演協）に参加する、子どもたちと一緒に劇を作る団体です。普段は主に岩手県や東北地方の、小学校の体育館や教室で「鑑賞会」として活動してい

ます。その使命や課題は「体験の格差を解消し、多くの人々が様々な文化芸術を、分野に囚われることなく感受できる環境作りをすること」。そのための最初の段階として「劇を通して子ども力を育む事業」を展開しています。文化芸術に触れる機会が少ない地域の子どもたち（まだまだ劇場に足を運ぶのはハードルが高い、小規模学校では予算が取れない、未成年のうちに劇にふれたことがない子どもが実際に多々いる等）に、劇に触れる機会を提供することで子どもたちのあらゆる力を育む一助としたい、この思いが劇団の活動の原動力になっています。

そんな「スタジオ・ポラーノ」ですが、この秋、念願の、童話劇「銀河鉄道の夜」を現代座会館で上演しようということになりました。過去、同作品を何度か作ってきました（ブルカニ博士の実験」として上演、「銀河鉄道の夜」としての試みで表に出すことが出来なかった。）が、今回は子どもたちが参加・体験する劇として新たに作りたいたいです。

劇場は出会いと奇跡の場所だと思っております。スタジオ・ポラーノやNPO現代座をそんな場所にしていくと、と思う今日この頃です。



## 体験する童話劇 銀河鉄道の夜

原作・宮沢賢治 脚色・澤藤桂 演出・八木澤賢 作曲・阿部明子

宮沢賢治の代表作「銀河鉄道の夜」を、大人も子どもも楽しめるちょっとコミカルな童話劇に。主人公ジョバンニと一緒に、夜の鉄道列車に乗って銀河の旅をしてみませんか？

場所：現代座ホール

期日：2022年11月26日（土）

27日（日）

両日ともに14時開演

（上演時間70分予定）

入場料金：2,500円

出演者の子ども（小学生1～6年生）募集中！

（各回10名、計20名 練習は11月23日と本番当日）

詳しくは何事もホームページまで <https://polano.net>お問合せ [info@polano.net](mailto:info@polano.net)

**ものがたり** ケンタウルスのお祭りの夜、いじめられっ子のジョバンニは、気がつく小さな列車に乗っていました。そして、すぐ前には友だちのキャンペルが座っていたのです。黒曜石（こくようせき）でできた地図を持って、二人は一緒に星をめぐる旅へと出かけたのです。

木村ノート◆われらいずこより来たる 第2部  
 ⑩ 1965年(1)世の中から捨てられた若者たち  
 木村 快

【第1部】日本新劇史・資料からのまとめ

- ①・レポート81号 1950年、新劇運動の分裂  
 中間派は「ヴェリテ・せるくる」を設立。
- ②・レポート82号 1951年、新制作座の出版  
 ヴェリテ解散。真山、草村、榎村で新制作座。
- ③・レポート83号 1954年、庶民の新劇を標榜  
 労働組合関係者の支持で全国公演が始まる。

【第2部】活動に参加した木村快の視点から

- ④・レポート84号 1959年(1)特別研究所開設。
- ⑤・レポート85号 1959年(2)巡演活動の実態
- ⑥・レポート86号 1960年 安保闘争。  
 平和集会では国際的要人からも注目が集まり、  
 インドネシア共和国から招請される。
- ⑦・レポート87号 1963年(1)  
 インドネシア訪問日本文化使節団の公演記録
- ⑧・レポート88号 1963年(2)  
 ユートピア、新制作座文化センター設立。
- ⑨・レポート89号 1964年  
 ユートピアの破綻・劇団員・従業員の首きり。
- ⑩・レポート90号 1965年(1)  
 世の中から捨てられた若者たち

【第3部】生まれ変わって

- ⑪・レポート91号 1965年(2)  
 新しい生き方を探して

1965年(2) 新しい生き方を探して

【自分たちは何者なのか】

◆何が何だか分からないまま見捨てられて

新制作座文化センターは総員150名。その内訳は全国を巡演する30名規模の公演班が3班、それに先だつて公演地を設定し準備を進める普及部員30名、劇場や大食堂を含めた会館を管理するセンター事業部などの部門に分かれて働いていた。全員が一堂に顔をあわせるのは夏と新年の二度しかなかった。そのため予告なしに突然解雇された70名は、なぜ追い出されたのか分からないし、追い出された者同士、お互いの名前さえよく知らなかった。

それなのに、新聞では解雇された側の取材をしないで、劇団側の発表に従って、一斉に「この若者たちは劇団を乗っ取ろうとしたらしい」と報道している。

若者たちの平均年齢は23歳。特に劇団歴3年以下の若者たちは、難関を突破して憧れの新制作座文化センターに入団したと思っていた。そんな若者たちが劇団側の仕打ちに憤激し、わけのわからないまま「映画総連（映画演劇労働組合総連合）」の指導に従って「新制作座不当解雇反対争議団」を結成したわけだ。60年代は学生運動の盛んな頃だったから、不当な仕打ちと戦うという意識は強かった。しかし映画演劇界の専門家たちは、争議団結成は創造者としての未来を失わせることになる懸念していた。

前号でも紹介したように、映画総連は新制作座に「せめて解決金を出して丸く収めてくれないか」と働きかけてくれたが、劇団側はこれを全く無視した。これでは若者たちは完全に社会的に見捨てられたことになる。年末も押し迫って突発的に発生した事件であり、特殊な事情を知らないまま、救いの手を差し伸べたはずの映画総連事務局も困惑していた。

【新しい生き方をつくる】

◆当面の体制づくり

とにかくバラバラにならないで一緒に考えようということにはなったが、何よりもまず生活費を稼がなくてはならないので、男は八王子市の鉄工所や倉庫の臨時雇い。女性は八王子市内の食堂やスーパーで時間制のアルバイトを見つけて働いた。

当面の生活費稼ぎで威力を発揮したのは照明、音響効果、劇場設備を担当するスタッフたちだった。都心のキャバレーや音楽ホールで働けたし、労働組合や政党の野外集会の開設作業を請け負い、これがみんなの生活を支える土台になった。

外部との連絡は8月に追い出された木村たち8人の仮住まいである杉並区永福町を連絡所とし、新劇界の実情を知るために歩き回ってみた。新劇関係者の間では案の定、新聞報道による反乱分子説が信じられていて、われわれに対する態度は冷ややかだった。争議団を結成したことはどうも逆効果だったようだ。こうなったら自分たちで生きて行くしかない。

◆行きつくところまでやってみよう

みんな話した結果、見通しは立たないけれど、新しい劇団をつくって、行き着くところまでやってみようということになった。その結果、次の3項目を前提にした。

- 1 「新制作座のような大集団主義ではなく、あくまでも参加者一人一人の立場を基本にした集団にする」
- 2 「この劇団に参加するかどうかは個人の自由にする」
- 3 「将来に向けて気の合った者同士で新しい独自のグループをつくってもよい」

◆5人単位で自由に動ける集団

70人のうち50人はまだ25歳以下で、正劇団員ではないが、新制作座は一般の劇団と違って入団と共に巡演



のための労働者として働くシステムになっていて、巡演活動に必要な作業は一通りできた。舞台創造者としては入団資格が演劇や音楽の専門学校程度の能力が求められていたから、全くの素人とは違って、入団と共に4部合唱や群舞の舞台に組み込まれていた。

前号で紹介したアコーディオンを含めた5人単位の「訴え班」は現場の労働者には圧倒的に評判がよかった。合唱しながら一人一人が自由に動き、踊り、客席に直接語りかけることができたからだ。

5〜6人単位なら一体的に動ける。宿泊設備がなくても主催者に頼んでおけば、個人宅に分宿することもできる。これを生活を含めた基本単位にすることになった。本部に常駐する生活担当や療養者も小グループ化し、必要な問題は総て小グループで話し合う。その上で全体を統括する事務局の判断で月に1回は全体で話し合う。

#### ◆劇団名をどうするか

新しい生き方を目指す劇団名については百論百出したが、「劇場へ帰れ」と主張したドイツの演劇運動家、ユリウス・バップの劇場統一論が浮かび上がってきた。これはわれわれを追い出した「新制作座」の名称が、フランス近代劇で相争った自由派と芸術派のどちらにも属さず、独自の道を目指した制作座の活動に共鳴し、頭に「新」つけたものであり、それならわれわれ争議団としてはそれに負けない理念的な名前をつけたい。

ユリウス・バップは演劇学者であると同時に労働運動指導者でもあり、労働者を指導して労働者自身による演劇運動を起こす。労働者たちは自ら作品をつくり、五つの劇団を編成して全ドイツを巡演していた。

わが争議団の場合は各地に分散して走り回っているが、チャンスがあれば、みんなが一つにまとまって大公演を上演し、また必要に応じて分流していく、変幻自在の劇団にしたいものだ。

それにしても「劇場」という考え方は大切だ。日本語の「演劇」は演じることを意味しているが、ヨーロッパの「シアター」や「シアター」は観客席を意味している。われわれも「見せてやる演劇」ではなく、集まった人々の共鳴感を高め、観客自らが未来を思い描く「劇場」の活動にしよう。そんなわけで、劇団名は全員一致で「統一劇場」とすることになった。

#### 【統一劇場の創立】

#### ◆自分たちの素顔で踊れ

争議団員の将来をどうするかが問題になったため、舞台芸術家組合と映演共闘会議では新しい道筋が開けるように「新制作座争議団を励ます集い」を開催してくれることになった。それをきっかけにして、新しい劇団の創立を宣言してはどうかというわけだ。しかし「新しい劇団」をアピールするには70人全員を紹介した



★ 1965年3月5日、まず「励ます集い」の準備公演として小金井地区労働組合の主催で小金井公会堂で上演。満員の客席に励まされる。



★ 1965年3月12日、日比谷公会堂で「励ます集い」上演。新しく「統一劇場」としてスタートすることを宣言。万雷の拍手を受ける。

いし、それにふさわしい舞台構成が欲しい。そうなる」と多少の舞台飾りも必要だし、衣装も必要になる。

そこで舞台芸術組合のメンバーや、かつて新制作座で音楽指導を担当していた岡田京子さん、インドネシア公演にも同行した振り付け専門家の本多静男さんなどに協力を求めて協議。

マスメディアによって身勝手な若者たちと宣伝されたのだから、逆に見捨てられた若者の素顔がなんの飾りもない裸舞台に躍り出て、自由に歌って踊りまくる構成舞台にしようということになった。

#### ◆現場労働者たちに励まされて

そこでまず1965年3月5日、「励ます集い」の準備公演として、小金井地区労働組合の主催で小金井公会堂で上演してみる。見捨てられた若者たちへの関心は高く、満員の客席は舞台と一体になって手拍子を打ち、歓声を送ってくれた。これは大きな自信を持たせてくれた。



★ 1965年8月、元八王子の山間部から小金井市への移住も終わり、初めて全員の集合写真を撮った。住宅街のはずれなので、周囲を気にすることもなく、自由な場所だった。

実はこの写真には70人以上の顔が並んでいる。「励ます集い」の開催に取り組んだ若者たちの間から入団してきたメンバーが含まれているからだ。

3月12日、いよいよ日比谷公会堂で全都の労働者を対象とした「新制作座争議団を励ます集い」が開かれた。この日はすぐ裏の野外音楽堂で「日韓基本条約反対集い」が開催されており、多くの労働者や活動家が参加していた。集会の主催者にも「励ます集い」が開催されるのが伝えられており、集会を終った参加者がその足で会場につめかけ満員になった。

労働組合のイベントのつもりで参加した人々は、舞台飾りのない裸舞台に大勢の若者たちが整列し、突然大合唱を繰り広げ、群舞で駆け回るのを観て相当驚いたようだ。演目は労働歌、インドネシア民謡、本土復帰を訴える沖縄民謡などが繰り広げられ、観客は次第に拍手を打ち、熱狂しはじめた。

この上演で新しい劇団「統一劇場」の評判が広がり、各地の労働組合に呼びかけると、地域的な広がりを持った公演が可能になった。そこでこのスタイルのまま、『夜明けの歌声よ響け』のタイトルを掲げ、群馬、長野、名古屋、京都、大阪、神戸で大公演の上演を続けた。公演地では5人ずつグループに分かれ、地域や工場を訪ねて歌や踊りで公演のアピールをする。

公演はすべて成功し、一寸したブームになった。何よりありがたかったのは、こうして全員が集中した活動を展開したおかげで、新制作座では別々の班で活動していた70人がやっと一体感を持てるようになり、活動意欲も高まった。

#### ◆統一劇場・本部事務所を小金井市に移転

「励ます集い」のスタートとなった小金井地区労組主催の公演（前ページ写真）ができたことは、小金井市に拠点を置くきっかけになった。小金井市職員組合が全面的に支援してくれたこともあり、小金井公会堂に付属する広い会議室では70人全員ではじめての総会を開くことができたし、街はずれには広い都立の小金井公園があり、構成舞台のレッスン程度なら空き地を自由に使うことができた。

小金井市には東京学芸大学があり、すぐ近くには国分寺市の東京経済大学がある。都心に出るにも便利だし、学生用の安い下宿が多くあって、拠点を置くには絶好の場所だった。集団下宿が可能な場所も確保することができて、狭いながらも一応本部事務所もできた。

#### 【山形雄策さんとの出会い】

##### ◆劇作家を探す

とりあえず開始したキャンペーン公演は活動の基盤を作る上では大切だが、安定した活動を継続するには大きな課題があった。前号で紹介した「劇場の発見」でも書いたが、未熟な俳優たちでも客が応援してくれるような劇作品が欲しいと思った。小さな作品でいいから、台本さえあればなんとかなると思った。しかし、残念ながら70人の中には劇作志望者がいなかった。

大映の撮影所で訴え活動をしたとき、「台本を書いてくれる人はいないだろうか」と話したら、「ガタさんに相談する」といい。あの人は困ってる人がいれば必ず助けてくれるよ」と言われた。

ガタさんとは実は偉い人で、戦前からの著名なシナリオライターであり、戦後も名作と言われる『暴力の街』、『真空地帯』、『武器なき戦い』など、硬派のシナリオ作家として知られる山形雄策氏のことだった。戦後の東宝撮影所大争議事件では労組側の中心メンバーの一人として知られた人である。

そんな偉い人が相談に乗ってくれるだろうか。緊張しながら山形さん宅を訪ねた。

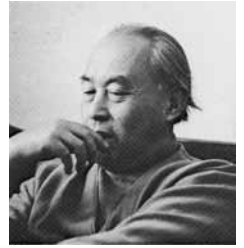
##### ◆自分で書け！

自宅は大映撮影所の近くで、ごく普通の民家だった。会ってみると確かに怖そうな人だった。ぶっきらぼうに「あがれよ」と言っただけで書斎に入れてくれた。

山形さんは新制作座争議団が発行した訴え文に目を通していたが、「これは誰が書いたんだ」と聞かれた。



山形雄策さん



「書ける者がいないんで、僕が書きました」

「新制作座で何年仕事をしてんだ」

「7年です。でも裏方ですか」

「芝居の本は裏方の経験が大事なんだよ。7年もやってりゃ、どんな本を書けば客が喜ぶか判るだろう。今は裏方の目で本を書ける作家はいない、自分で書いたらどうだ」

「でも、書いたことがないし、書こうと思ったこともないんで」

「とにかく文章が書けるんだから、自分で書け！書いた物を持ってくれば見てやるよ」

相談はそれで終わりだった。どうしたらいいのか判らず、暗い気持ちで本部に帰った記憶がある。

【第一作『雑草のうた』】

◆とにかくやってみるしかない

主力メンバーは歌と踊りの構成舞台で全国を回っていたので、東京周辺を歩き回っていた5人組メンバー2班を使って、コントまがいの小さな本を書いてみようと思った。

この時期、東京オリンピックも終わり、日本の産業界は再編成のまっただ中だった。大企業中心の労働運動は華やかだったが、中小企業の未組織労働者はほとんど無権利状態のまま放置されていた。

未組織労働者のドラマなら、マスメディアから見捨てられた統一劇場にはふさわしいかもしれない。5人組はそうした小企業の労働者と接することが多かったから、本格的なせりふ劇は無理でも、若い労働者の観客が相手なら歌と踊りを組み合わせるとかなるかもしれない。

◆意外な助っ人・日下部熙（ひろし）さん



日下部 熙さん

そこでみんなといる話し合ってみた。すると本部事務局に意外な助っ人のいることが分かった。新制作座出版部から解雇され、争議団に加わった日下部ひろしさんである。ぼくらより年上でいつも黙って仕事をする人で、ただの出版編集者だと思っていた。

仲間たちの話では日大芸術学部出身で早稲田大学演劇図書館ホルルの運命座で働いていた人だと言いつし、劇団新派や前進座文芸部に在籍した経歴もあるという。さらにテレビ時代劇にコミカルな役で出演していたという話まで飛び出した。だとすると演劇のことは知り尽くしている人だということになる。

そう言えば、ぼくが慣れない争議アピール文を書いているとき、さりげなく「参考になるかもしれない」と昭和9年に発禁本となったユリウス・パップの『演劇社会学』を貸してくれたのも日下部さんだった。

日下部さんは意見を求めると丁寧に教えてくれたし、台本上の話の展開の仕方についても、適当な台本の例があることを教えてくれた。実はプロだったのだ。

◆『雑草のうた』の内容

とにかくみんなの力を借りながら、作品名を『雑草のうた』と決めて、次のような作品を書いてみた。

農村出の若者たちの働く町工場が倒産し、社長は夜逃げ。とり残された八人の若者たちは途方にくれるが、給料を貰わなければ故郷へも帰れない。そのうえ、工場の敷地を買い占めた不動産屋からは「すぐ出ていけ」と迫られる。夢も希望も無くした彼等が、いがみあい、助けあう中で、やがて自分たちの運命を自覚し、仲間への信頼と友情を築いてゆく……と、そんな都合主義的な筋書きである。

劇中歌は作曲家の岡田京子さんの協力で、出演者が

それぞれ思いついた言葉を引き出し、それをまとめて、何曲かのコミックソングをつくってくれた。劇中の短い踊りも振り付け師の本田静雄さんが形にしてくれた。

◆思いがけない成功

とにかくこっそり試演してみた。ところが観客は爆笑に次ぐ爆笑で、悲しい場面ではシーンと静まり返る。ラストシーンは希望を表現した短い踊りで決めると、万雷の拍手である。

劇場という空間は実に不思議な場所だと実感した。緊張して観ていた劇団員一同も「ああ、これならなんとかいける」とひと安心。

実は山形さんもこっそり見ている、客と一緒に笑っていた。しかし決して技術的な助言はしてくれなかった。若い作家は助言に頼ると、自分の特徴を生かせなくなるというのである。ぼく（木村）にしてみれば、劇団の活動全般に目を配っていなければならぬ立場なので、劇作はいづれ学生演劇の経験を持つ仲間へ託そうと思っていたから、ちょっと複雑な気分だった。

『雑草のうた』

は一応「歌芝居」ということにして全国公演を展開することになった。

1966年12月から1968年まで、まず長野、群馬で上演してみ、それから思い切って中部、関西、広島から九州まで、全国224公演を実現した。

【以下は次頁】



★「ここは不動産会社の土地だ、早くでていってくれ！」  
「俺たちはまだ給料も貰っていない。俺たちは労働者だぞ！」

## お知らせ

人形劇場「花かご」の上演

10月23日に人形劇場「花かご」の単独公演が行われます。大人も子どもも楽しめる人形劇です。

日程 : 10月23日(日)  
 場所 : 現代座3F小ホール  
 開演時間 : 13時30分  
 参加費 : 大人1500円 中高生1000円 子ども500円  
 【問合せ】すがの : 090-4525-7880  
 ryou-sou.mama@i.softbank.jp

現代座公演をYouTubeで見られます

『プリンギン・ホテルにて』

URL <https://youtu.be/ndx5p9ucmpI>

『風は故郷へ』

URL [https://www.youtube.com/watch?v=mJESquAU\\_zY](https://www.youtube.com/watch?v=mJESquAU_zY)

◆ DVD 郵送もできますのでご希望の方はご連絡ください。  
 TEL 042-381-5165 FAX 042-381-6987

## みどり子ども会の陶芸教室



7月30日(土) 現代座のある小金井市緑町で活動している「みどり子ども会」が、現代座2階で「陶芸教室」を開きました。

現代座も加盟している緑町第2町会は役員会や総会を、現代座を会場にして開いています。

子供会が使用するのは今回がはじめて。教室のあとではホールの見学もして、こどもたちは大喜びでした。

現代座会館2022年6月～8月 活動日誌

6月7日 木村快を囲んで「新快塾」

11日 「現代座レポート90号」発送作業

8月21日 NPO現代座会議

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

〔現代座ホール〕

6月11～19日 「東京ナイフ」稽古・公演

23～26日 「ながめくらしつ」公演

28日～7月11日 現代座「プリンギン・ホテルにて」稽古・公演

12～21日 「劇団仲間」稽古

8月1～12日 「劇団おぼんろ」稽古

13～16日 「ふるきやら」稽古

20日 「Mikagashi」稽古

24～25日 「スタジオ・ポラーノ」稽古

〔二階小ホール〕

6月6日 「コールムーン」合唱練習

14～20日 現代座「プリンギン・ホテルにて」稽古

7月20～21日 「リトル銀河」稽古

8月7日 津田・リトルコンサート

13～14日 「劇団おぼんろ」稽古

15・18・20・21日「スタジオ・ポラーノ」稽古

31日 「花かご」稽古

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

〔二階サロン〕

6月25日 緑町第2町会役員会

7月30日 みどり子ども会・陶芸教室

8月6日 緑町第2町会役員会

26日 ワーカーズ新人研修

毎水曜 熟年パソコンサークル

隔木曜 隔木曜日 iPad 熟年講座

## NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円

協賛会員 10,000円(1口以上)

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座